

論文要旨

古代和歌表現の機構と展開

津田 大樹

本論文は、『万葉集』を主とする古代和歌の表現機構を確かめ、その成立する経緯と史的な展開を論ずるものである。ここで表現機構というのは、以下のような意味においてである。

一首の歌を構成する個々の語は、表現として全てが等価な機能を担っているわけではない。一首の歌の中には、その発想を導き表現を成り立たせるための核となる語が存する。本論文で考察する心情語（第一章）、景物（第二章）、死の表現（第三章）、地名（第四章）はいずれも、こうした意味において歌の核となる語であると考えられる。こうした語に着目することによって歌の表現の機構を確かめ、またその確立と展開の過程を考究することができる。

第一章で取り上げた心情語は、歌の抒情を担うものと言えるが、古代の歌の表現史を辿ると、個人が自己一人の心情を歌うという行為が、自明のものとして無条件にあり得たわけではない。「はや」「はも」などの終助詞による表現、感動詞「あはれ」の表現などが心情表出を担う用法として先行的に認められ、やがて「かなし」「くやし」などの情意性形容詞が、各々に分化された心情表現を成り立たせる語として和歌表現のなかに定着していくこととなる。こうした心情語の表現に着目することによって、抒情詩としての表現機構と、その確立、展開の経緯を明らかにしていくことができる。

第二章では景物に関わる表現を論じた。景物は詠物歌の主題となる一方、歌の発想の起点となり序詞などを通して心情表現を導く機能を果たすという点でも、一首の核となる言葉と位置付けられる。具体的な論点として、春夏秋冬の四季区分に基づく季節認識の確立を確かめ、四季に応じた景物の詠法や、温感表現の特質を明らかにすることによって、古代和歌における景物の表現の確立と展開を把握することができる。また景物は、人物を偲ぶための抛り所として詠まれており、景物の詠法に着目すると、讃歌、羈旅歌、相聞歌、挽歌など、題材の異なる歌それぞれの場合における表現機構の特質を確かめることができる。

第三章では死の表現を考察した。死の表現には、当代の死生観や信仰等を前提として成り立つ面もあるが、死という出来事の意味は必ずしも自明のものではなかった。逆に、歌として表現することによって、死の意味やイメージを新たに創出していくという面を重視する必要

がある。そして、死をどのように形象化するかということが、人物の死に対する心情表現の内容を大きく規定していくことになる。まず行路死人歌においては死の現実を率直に表現するという点に他の万葉挽歌とは異なる特質を認めることができる。そして特に人麻呂以降の挽歌においては、対象となる人物や作歌事情の相違、枕詞などによる死の形象方法の相違などによって、歌の主題に即した表現が確立している。また、「すぐ」「かくる」など死の表現に用いられる語についても、「敬避性」という観点だけではなく、それぞれの語義に応じた死の形象が一首の歌を成り立たせていることが確かめられる。

第四章では地名表現を取り上げた。古代の地名は種々の事跡の記憶と伝承を担う役割をもっていた。地名表現に着目することによって、古代和歌の表現の機構や享受、伝承の経緯を明らかにすることができる。また、後代の歌枕に継承されていくような地名の詠法は万葉歌においても認めることができる。地名が特定の景物と結びつき、また掛詞や縁語によって特定の語彙を歌に呼び込んでくるという点において、地名が一首の発想の起点となっていくことが確かめられる。

第五章では、歌の表現を、詠作、享受、伝承という史的な場と経緯の中で改めて捉え直した。歌の表現を語句の解釈という次元で考えるだけでなく、現実の歴史の中で歌が詠作され、享受され、伝播し伝承されるという経緯を踏まえることによって、実態に即した歌の理解を得ることができる。

論文審査結果の要旨及び担当者

提出者	津田 大樹
論文審査担当者	<p>(主査) 教授 佐倉 由泰 教授 佐藤 伸宏 教授 佐藤 弘夫 准教授 横溝 博</p>
論文名	古代和歌表現の機構と展開
<p>本論文は、『万葉集』所収歌を主たる対象にして、古代和歌の表現の機能、しくみと史的展開を明らかにすることをめざした考究である。論文全体は、序章、終章を含む七章の構成を具え、本論となる五章は二十八の節から成っているが、論者は、その各節で、古代和歌の詠出の基点となる表現に着目し、用例と意味を幅広く丹念に検討し、一首一首の和歌を緻密に読み解くなかで、説得力に富む見解を次々と提示している。</p> <p>五節から成る第一章では、『万葉集』の心情表現に着目し、第一節で「はや」、「はも」、「あはれ」の、第二節で「もとな」の、第三節で「かなし」の、第四節で「くやし」の、第五節で「泣く」ことの表現の意味、用法を検討し、各表現がそれぞれに特定の心情の表出を可能にしたことを論じている。第二章では、八節にわたり、『万葉集』の景物表現について検討し、第一節では、古代和歌における季節の表現の成立の意義を、第二節では、温感表現「寒し」の意味、用法を、第三節では、「見る」こと、「聞く」ことそれぞれの認知の特性と和歌詠出上の働きを、第四節では、詠物をめぐる讃歌と挽歌との類同と差異を、第五節では、羈旅歌、相聞歌と挽歌との間の「雲」の表現の共通性と相違を、第六節では、景物を介して人を偲ぶ表現に見られる、羈旅歌、相聞歌、挽歌それぞれの特質を、第七節では、囑目の景物をもとにして亡き人を偲ぶ詠法を、第八節では、「カタミ」の本来の語義とその変遷を明らかにしている。『万葉集』の死の表現を考察する五つの節から成る第三章では、第一節で、行路死人歌が死の意味とイメージを新たに創出したことを、第二節で、柿本人麻呂の挽歌に見られる三様の死の描き分けを、第三節で、人麻呂の挽歌の死の表現が枕詞表現の質的転換にかかわることを、第四節で、死の表現「かくる」が埋葬や日月の様態にもとづくことを、第五節で、死の表現「すぐ」が葬送の道行から発想されたことを指摘している。第四章では、二つの節で、古代文学における地名の重要性に着目し、第一節で、地名が多様な言説を引き寄せ、保持し、変容させる働きを担うことを、第二節で、『万葉集』の地名の異訓が新たな歌枕の生成をもたらすことを論じている。第五章の八つの節では、『万葉集』の「岡本天皇」の歌、「山科御陵退散歌」、山上憶良による有間皇子追和歌、柿本人麻呂による香具山の死者を悼む挽歌、枕詞「クサマクラ」、遺された近親者のために詠まれた挽歌、亡妻挽歌、東歌の挽歌をそれぞれ詳細に考察することで、古代和歌の詠作、享受、伝承の場の実態を捉えようと試みている。</p> <p>上記のような本論文の論述は、古代和歌の特質と史的展開を明らかにする上での重要な示唆に満ちており、その成果は、斯学の発展に寄与するところ多大なるものがある。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	